



アラソン

ローママンディーア人の
プロポIV
【2013年12月号】

翻訳：高村昌憲

- 九十一 新エロイーズ (LA NOUVELLE HÉLOÏSE)
- 九十二 プロシア人の手紙 (LETTRE D'UN PRUSSIEN)
- 九十三 (パナマ運河)
- 九十四 (プルードンとルソー)
- 九十五 国民の美德 (VERTUS DU PEUPLE)
- 九十六 (比例代表制の支持者たち)
- 九十七 (列車の運行)
- 九十八 (主人と召使い)
- 九十九 (共和主義者)
- 百 (人間の魂)
- 百一 (ポワンカレの死)
- 百二 (代議士たちの仕事)
- 百三 人数と権利 (LE NOMBRE ET LE DROIT)
- 百四 (民主主義と政党)
- 百五 (普通選挙)
- 百六 (法律)
- 百七 小さな水溜まり (PETITES MARES)
- 百八 (労働契約)
- 百九 (陪審員)
- 百十 (雲)
- 百十一 (愛国心)
- 百十二 (労働)
- 百十三 (改心)
- 百十四 (戦いの準備)
- 百十五 服従の義務 (LE DEVOIR D'OBÉISSANCE)
- 百十六 公務員たち (FONCTIONNAIRES)
- 百十七 (自由な思想)
- 百十八 (平和主義)
- 百十九 (情熱と理性の働き)
- 百二十 (戦争に必要なもの)

九十一 新エロイーズ (LA NOUVELLE HÉLOÏSE)

ジャン＝ジャック・ルソーの『新エロイーズ』は、最も美しい小説の一つです。ルソーに関する論議で自分の考えを持ちたいのなら、この小説は読んで下さい。さもないとある意味で、それは誘惑された娘の大変魅力的な恋愛の絵であっても、その内容は不実であると言われるようなものです。この本は美德の称賛以上に、非常に優れたものを生んでいます。それは快樂と苦悩の間で見させている超人です。抽象的な理屈を言っているのではなく、大地に足を付けた理性です。家庭教師の聖プルーのような、高潔な娘ユリアの中にいる男性のようなものであり、それが全てではないけれども精神の力になっています。それらは本当の恋文であり、そこでの恋は沢山の思考が目覚めます。理性的なこの会話を意地悪く受け取ることも出来ますし、道徳的に反省するこの恋する娘を嘲笑することも出来ます。他の言い方をすれば、それは馬鹿正直で誠実で頑固なのです。同様に、媚びを売る娘の退廃ともかけ離れています。妄想でも幼稚さでも墮落でもありません。生まれつき強いのです。愛の勝利です。しかし、義務はその儘です。この激しい愛には可能な限りの尊敬と友情そのものがあります。儀礼的な素顔を見せないその他のやり方には、余りに動物的なものが忘れられていました。ルイ十四世時代に代わってオルレアン公フィリップの摂政時代が続きましたが、それは我慢ならないシニスム（犬儒）の時代でした。人間の愛の形は見出されませんでした。従って、ユリアのことは特別な成功を取めたものであると私は理解しています。母の愛は夫婦愛の結果であり、そして決して恥じるものではありません。欲望は感情になりました。自然は人間の眼に一つの感覚を与えました。というのも全てがこの強固な哲学に保持されているからです。女性と子供はそこに自分たちの高貴さを見付けます。そして、『エミール』が悪い父親の作品で、『新エロイーズ』のユリアがテレーズ・ル・ヴァスールの恋人によって書かれたことに、もしもあなたがびっくりしているなら、それはあなたが如何に人間性を取り戻して明らかにして救済するのかを理解していないことなのです。ルソーは間違いを受け入れませんでした。

小説では結婚まで行きません。多分、邪魔された愛しか描けないのです。ユリアが自己を犠牲にするのは何時ものことです。社会的関係が最も強いのです。恋愛は友情に変わらなければなりませんし、それは家庭教師としての愛です。理性は感情を変えられるのでしょうか。間違いも償うことが出来るのでしょうか。如何にやるのでしょうか。家族の力によってです。情熱が憎悪とか絶望とかに変わることを望んでいないウォルマールの賢明さによってです。家族の配慮、子供たちの教育、美しい湖で過ごす四季、全てがユリアの美德を成長させます。後悔がない訳ではありませんが、それらは活発な理性が償い、補強し、整えて全てが支えられています。ユートピアです。ユートピアは全てが倫理です。誰も欲望や情熱から免れることが出来ません。しかし、それらを導き、呼び戻し、人間の秩序を望まなければなりません。

ユリアは死にます。他に彼女を救うことが出来なかったと人は言うでしょう。しかし、この美しい詩の流れに従って私は寧ろ、この思いがけない全く偶然の出来事は償いきれない不幸の入口ですが、想像力による全ての不幸を減らすためにあると信じています。そして、この美しい湖を見に行ってください。湖はあなたに何でも言ってくれます。

(一九一二年六月二五日)

九十二 プロシア人の手紙 (LETTRE D'UN PRUSSIEN)

「第十槍騎兵の予備の陸軍中尉ユゴー・ヴォン・トゥフェルベールは、シャンパン製造業者〈ガリア〉ですが、アランにとってはフランス共和国の市民です。彼は、あなたや友人たちが議論の題材にする〈力〉と〈権利〉の関係について大変に尊敬された人間で、私の話にも何らかの英知の光を投げ入れてくれます。

私たちには十人の子供がいて、プロシアの小さな町には既に一部屋に三人おりましたので、私は人手のないあなたの美しい地方のことを考えました。私はシャンパーニュ地方へ行き、直ぐに使用人になりました。私は成功しました。今では町で一番大きな家に住んでいます。〈ガリア〉のマークのシャンパンは、四百万人に飲まれています。他のドイツ人たちも続いて同じ道をやって来ました。私たちがドイツ人労働者に来て貰ったのは、あなた方の家の労働力が大変に手薄だったからです。私たちにはここにドイツ人地区がありますし、四千人以上がおります。

そのことは、戦うことなく人は理解し合えることを証明している、と恐らくあなたは言うのでしょうか。しかし、大変に尊敬されている人間であるあなたは、私たちが巨額の税金を払っていても、この町では私たちドイツ人が市議会議員や市の役人になれないのを良く知っています。私たちは公務について如何なる活動も出来ません。退職年金のためにもお金を払っていますし、少なくとも私たちが払い込んだお金はフランス人たちの給料に行っています。冶金工である私の友人は、国の入札から排除されています。その入札は不況の時には頼みの綱なのです。要するに、私たちには義務は全てありますが、権利というものが大変に少ないのです。

あなたは更に、私が帰化すべきであると言うのでしょうか。しかし、現代の武装化された平和状態において、あるが儘に受け入れるとしても、あなたはドイツ人家族にあなたの国の機甲部隊の兵やアルジェリアの兵になるように要求することは出来ません。従って、私たちは忍耐してすり減っています。十年後か二十年後に、国境付近の地方では私たちがフランス人よりも多くなっているでしょう。そして、私たちは優れた使徒たちに権利のことを言うでしょう、「初めまして皆さん、この地方の住民投票で、市民権を享受出来るようにドイツとの併合を要求します」。そして、それが当然なことになるのでしょうか。

その時は、銃声が聞こえて来るでしょう。というのも権利は、両者の側にある場合があるからです。力だけがその時は法を作るのであり、権利を決定します。我らのビスマルクが力は権利に勝る、と言うのは間違っていました。曖昧で出口のないどうしようもない論争においては、力が権利を生み出すと言わなければならないでしょう。確かに、平等という唯一の法則の下に行動したいと思うことは美しいことです。でもそれは組織の中から力を排除しています。私たちが肉と骨で出来た生身の人間であり、力に従うことは先ずは受け入れなければならない条件です」。

私はこの手紙を受け取ったのですが、これはあなたが良く予想出来るようなドイツ人からのものではなく、プロポの中で私としては、あらゆる問題が提示されなければならないと信じている友人からのものでした。学校の先生という職業は、決めつけた言い方をしません。〈弁護士という仕事〉では断定的に言います。そうなのです、しかしそれが誠意であり、損得ではありません。

(一九一二年六月二七日)

九十三 (パナマ運河)

パナマ運河でのアメリカ人の蚊との戦いは、自然に対する人間の〈意志〉が勝利した良い例だと思います。この例は〈倫理〉という水の流れの中で、色々と言われなければなりません。私は〈意志〉について読んだ本の中で、何か為になるものを見付けることは滅多にありません。ヘラクレスの神話のように決断と選択の役割を人は何時もそこに見たいのであり、この英雄は悪徳と美德を交互に表しています。ところでこの思想は美しいのですが、私の好きな経験とは非常に異なっています。間違った選択で自分を見失った若者たちを私は決して理解しません。彼らは賭けやアルコール中毒や詐欺行為に陥り、間違った意志と言うよりも寧ろ怠惰であるのが分かります。彼らには選択すべきものがなかったのであり、そして選択しなかったのです。成り行きに任せた儘なのです。彼らは行動しません。我慢しています。善意さえも取って置きました。それははっきりしています。彼らは時折、仕事に手をつけるのかどうかも決めていました。しかし、何の仕事をしようとするのでしょうか。

ここでは動機を検証して形どおりに多分何かの討議をしても、自分たちの夢の中身の中に身を置いているのです。結局のところ理屈っぽい知性が生んだ果実の一つとして屢々目立っているのですが、まさに自然に躊躇しているのです。それはまるで私が自問していたかの如くです。「私は今日、何を考えようとしているのだろうか」。あるいは又、「私は有益な本を良く読みたいのですが、何の本なのだろうか」。現実に私は何かを考えますし、そのことを考えたいのです。つまり私は立ち止まり、仮定や推論を行い、そんなにも早くやり過ぎさないで、英知の光を十分に当

てて、私が出来る限りにおいて偏見を振り落とします。特に、先ずはその意味では結果は私次第であるという元気づけられたこの考えと共に、もしも私が考えることが出来ることしか決心しないなら、私が考えないのは極めて確実ですし、混乱した夢想に陥って、如何なる進歩もないでしょう。読むことも同様です。方法よりも重要になる選択はありません。

私が考えているアメリカ人たちは、彼らが追い求めた目的について決して熟考しなかったことを注意して下さい。その目的は医者とか自然主義者とか管理者の仕事が課せられますし、決して選択したものでもありませんでした。或る人は微生物を良く観察し、他の人は蚊を良く観察しました。その他の人は病気で、水溜まりです。一人ひとりがやって来たことを行いましたが、注意して力強く、継続して、自信を持って行いました。それらの目的については何時も考えていませんが、方法については考えます。毎朝、仕事を始めてはやり直し、賢人が言うようにハンマーを使って最良のものを鍛えるには時間がかかるのです。私は彼らの道には〈意志〉を見ますし、何時も決心し、何時も歩き、そして考え込む代わりに試行します。要するに沢山の職業があつて勇氣を持ってそこにあなたが入れれば、全てが正しいのです。そこに存在する前に、もしもあなたが選択する状況にあつたならば、全てが間違っているのであり、既に最悪なのはあなたがそこに存在する時、選択することは不平を呼ぶことになります。選択に迷って死んだかの有名なビュリダンの驢馬(1)について言うべきことがあるだけです。「良く似た幾つもの事例について、くよくよ考えるのは大変に無知な人間なのです」。

(一九一二年六月二九日)

(1) ジャン・ブユリダン(一三〇〇頃~五八以後)は、スコラ哲学者。ビュリダンの驢馬は、飢えて喉が渴いている驢馬は、干し草も水もどちらも選択出来ないという寓話である。

九十四 (プルドンとルソー)

ポスターは恐るべき行為を生む一方法です。アクション・フランセーズが張ったジャン=ジャック・ルソーへの罵詈雑言を読む人々を想像してみます。その反応は大したことではありません。でも皆がポスターを読みます。新聞を選択して読めば、ポスターがあなたの眼に飛び込んできます。行為には行為で報いなければなりません。しかし如何なる行為なのでしょう。

現代の貴族主義者の男性たちには、プルドン主義者がおります。この状況で彼らはルソーに対してプルドン(1)を対立させました。他には言うことがないのですが、町の壁にはプルドンの名文の頁が貼られることになります。というのもプルドンは激しくジャン=ジャック・ルソーを否定していたからです。しかし、この思想の動きには理解が必要です。プルドンは

ルソーと同じ道にいます。彼はルソーのように全く独りで研究していました。独りで教会や権威哲学と戦いました。結局は自分の方法が唯一であり、しかるべき地位にある人間というものは何事にも嘘をつき、職務上は民衆を騙し、正義や革命を力によってのみ決定づけることを強く主張しているのは確かです。このティタンという巨人は、オリンポス山に反対して理解するなら立派です。

そして、ルソーに対するプルドンの怒りは何処から来るのでしょうか。それを理解するのは簡単です。プルドンよりも前のルソーのように、プルドンも司教や経済学者に或る種の皮肉からの寛容を示しています。彼らは十分に償われた割の良い詭弁家たちです。「しかるべき地位に就いた人間の考えることは俸給である」。しかし、ルソーは誰の奴隷でもないのが良く分かります。彼の批判的書物が大成功だったことは、貧困への反対を確かなものにします。彼は、友人や庇護者たちにも反対することもある思考するこの力を持っていました。しかし、この力は何を生んだのでしょうか。人間の良心への彼の讃歌は、間違いなく有名にしました。しかし何故、神や天国なのでしょう。抽象でしかない政治的問題を決定するのに、何故、弁証法論者の力を利用するのでしょうか。どうして彼は、私たちが小舟で大洋へ乗り出すように、経済の力を無視したのでしょうか。最も辛い奴隷と極めて容易に両立出来る空想的な平等とは何でしょうか。この裕福でない権利、つまり力のない権利とは何でしょうか。今日の社会主義者は、急進主義者に対して際立った議論をしません。もしも先生が何かを評価したなら、生徒は先生に対して手厳しくなり、激しく厭な顔をするでしょう。それが掟です。その意味においてプルドンは、ジャン＝ジャック・ルソーの敵です。しかし、もしも現代に話を戻すなら、彼はバレスやモーラスの味方であると思っているのでしょうか。

彼は何と言うのでしょうか。勿論、彼が言ったことは確かに十分でした。それ故に誰もが、次のような表題としている新しい貴族主義としてのそれらの聖書を古本屋や図書館で探します。『経済的矛盾』『革命と教会の正義』『所有権とは何か』です。人権擁護連盟やフリーメーソンのロッジ（集会所）では、それらの書物からのアンソロジーが作成されたり、壁に張り出されることになります。その論拠は噛むと酸っぱいように、辛辣なそれらの文書は、民衆の図書館にも置かれるために再版されます。全ての武器は正しくないことを、イエズス会修道士は知ることになるでしょう。そして民衆が、プルドンの本を読みながらルソーを愛していたことが回復したなら、私たちは安心して大いに笑うのです。

(一九一二年七月三日)

(1) ピエール・ジョセフ・プルドン(一八〇九～六五)は、社会主義者でアナーキズムの創始者である。

政治的状況が如何なるものであっても、最も明白であると思うことは、支配者よりももっと大切なのは国民です。そのことを猛然と否定しようとする人々であっても、その次には打算もなく献身するナポレオン軍の兵士たちを褒め、その証拠を感動的に見出すことが出来るのは、夕食後の食卓で読むバルザックの『田舎の医者』です。反対に多くの裏切りの事例は、上層部からのものしかありません。ナポレオンはそのことを証明しました。それによれば権利の番人たちは、他人の富に打ちひしがれて辛い仕事に甘んじていました。そして彼らは、明日が見えない哀れな人々の中にいると言わねばなりません。その上で私はドレフュス事件のことを言うのですが、それは良い経験になりました。もしも当時、少なくとも最も力のある人の言うことを聞いていたならば、正義は犠牲になっていたことでしょう。国家的大義名分に反対して立ち上がった勇気ある人々は押し潰されていたことでしょうし、既に一般大衆はそちら側についていた時代でした。

この歴史的イベントにおいては私たちのためになることがあります。それは政治の殆ど全てが国民感情の上で勝利を収めているのであり、まさしくそれらが今日を築いているかの如くです。次の厭らしい言葉を人は良く知っています、「あなたの選挙区を見詰めなさい」。それを要約すればこう言っているのです、「国民は公平を馬鹿にしており、基本的には現状の犠牲者はお金持ちの社会のためなのです。有権者たちも自分たちの利益しか見ていません。こんなことを議論しても熱心ではありません」。ところが選挙区では、体面を保った代議士たちが大変に多く押されて出ていることが起きています。私は最近、滑稽と思われることを一口に引用して言いました、「国民は神聖なものを全て裁いています」。兎に角、それが当時の国民の道徳性を判断しているのは事実です。というのも権力は、地下牢を閉めながら恥をかくことしか考えてこなかったことを人は覚えているからです。

国民のこれらの美德は、良く物事を決定する元になります。私が持ち続けている主張は、神秘主義にならないことです。国民はうわごとを言う〈神〉ではありませんし、本能的に正義を示しています。ここには基本的に元となるものがあります。それは文字通り、政治的権力や弁護士と言われる理屈屋たちを何よりも信用しないことです。国民は、お金持ちの冷たさを日々証明しています。彼らの理屈を裁きます。国民は自分の仕事に生きています。そのことが現実的で冷静で健全な判断力の基礎になります。ところが既に進歩的な野心家にとっては、方法と結果の間に決して関係がないのです。陰謀や好機が多く生まれます。結局のところ仕事も同じで、国民が何事かを行う時、塀の下には良く言われるように正確さと良心が必要とされます。技術者は実際に一時間飛ぶことが出来ますし、報告書とか調査を無視することが出来ます。ガラス張りの機関士室で転轍手は両眼を背けることが出来ません。技術者はその中は機械の人質です。井戸堀職人は頭上の坑木に通じています。ところが国の行政機関は、移り気、特別待遇、無駄な仕事に良心をすり減らしています。以上は、国民が正しく判断する理由になります。しかし権力者たちは、国民が正しく判断するのは本当でないと呼ぶ理由にしているのです。

九十六 (比例代表制の支持者たち)

比例代表制を支持する人々には、民主主義国家を危険なユートピアと見做す多くの人々がいるのを私は知っています。彼らは言います、「何故なら国民という人間は全体が纏まって政治を考えるのに必要な意識も余裕もない。実際に国民は決して政治を導かない。政府は平和と戦争、植民地化、征服、条約を決定するのであって、実際には〈国家〉と相談することはない。そして、政府は如何に出来るのであろうか。でもそうではない人々は皆、明らかにこれらの重要な決定に従っている。従って共和国制度は、根本的には他の如何なる制度とも合っている。それは共和国全体で起こった事件の監督を、世論という検閲に従わせている。その意味で家系というものは、世論に従属する。しかし世論は、一方で批判やあちこちで何時も最も理性的な手段が齎す不平や要求によって、他方を無効にしようと自然に求めている。従ってそれは、代議士が有権者たちに親密に従属することよりも良いことではない。比例代表制によって私たちは党派を強固にしている。私たちは団結によって強くなり、勢力を増した民衆の上で、多少なりとも活発な反動的党派や有権者の批判を、幾つも持つことになる。この方法によって抑制された小さな不満が途中で止まる。支配者たちは信用や自由を少しは思い出す。要するに、私たちはこの改革によって全ての社会機構の本当の基本に近付くのである。私たちは権威を回復する」。以上は、私の眼で見た改革者の活動の意味ですが、そこに私は民衆に対するエリートや、大衆に対する特権者の努力を見ます。

しかし私は、もっともっと気高くて、他のことを忍耐しているような者たちと結びついている市民たちとも知り合いです。彼らは、平等が非常にゆっくりと実現すると判断しています。何故なら有権者は感情的な情熱によってしか判断しないからです。その状態は、私たちが彼らには、非組合員でアナーキズムであるように思われています。彼らは言います、「私たちは首尾一貫した計画と、十分に強固で調和してそれを実現するための、大変に大きな権威を与える党派を望んでいる。それは国民の意志に反対して行うことが重要ではなく、反対に情熱を無視して毎日の出来事に従って邪魔し合うことに勝るようにさせるのが重要である。結局のところ国民は、自分の友人たちを良く信用しなければならない」。

これらのごもつともな話に、しかしながら私は専制政治の小さな種子を発見します。それと同時に危険な慌ただしさも発見します。というのも有権者たちという民衆は、計画を作ったり運用するものではないからです。彼らは何回も模索します。それが極めて自然です。民衆の精神は形づくられません。新聞は、彼らが望んでいるものを信じさせてくれます。田舎の人々は自分たちの権利や力を意識するのに辛くなり始めています。権力と合致する困難や疑問の複雑さを殆ど疑いません。政治的教育は自分で行わなければなりません。そして、その様なことが現代の制度に

おける代議士の基本的な仕事になります。というのも人事業務は最早、十分足りているからです。利益は一つに集中します。同業組合が議論して望むのは合理的です。事の成り行きによって、郡選出の代議士は、だんだんと専門家や教育者や世論の味方になります。しかし、それは会話や議論によってです。先ずは、腹を割って認めることです。そして本を読むか、民衆を前にした演説で再び否定します。私たちはそこにおりません。正々堂々と共和国を営為しなければなりません。私たちはそれを望んでいます。ところで、今は一般の有権者たちにおいて組織的な再編成は、十分に支持されておられません。私たちには急激な変化とその反動があり、結局は政治的無気力や諦念や政治史への失望に戻ります。その次が革命であり、私たちはより多くの事例を与えています。

(一九一二年七月七日)

九十七 (列車の運行)

あなたは恐らく、イギリス人の実験を読んだことと思います。今でも秘密の装置が問題で素晴らしいものであり、衝突事故を回避するために使われます。それをテストするために、二台の機関車を操縦者なしで向かい合って発進させました。私が思うに、それらの機関車には何人かの若い技術者と発明家が乗っていたと思います。二台の機関車は自動的に、お互いが数百メートルの処で止まりました。それらは危険な遊びですが、発明家のためと言うよりも未来の旅行者にはより良くなるものです。何故でしょうか。何故ならそれらの装置は、私たちが注意しなくても良くなるからです。技術者の自信は私には不安です。私を安心させるには、そのことだけが心配です。私が旅行者であったなら事故のことは考えたくありませんが、技術者には何時もそのことを考えて欲しいと思います。この点を良く注意して下さい。事故を心配すればする程、事故の可能性は少なくなります。

私にとっては既に長い間、あらゆる種類の衝突事故に対して優れた方法を発明しました。それは二段階の予防からなります。先ず第一段階は、踏切と道路の交差点を取り除くのです。全てのポイントの操作は、列車の往来とは逆の別の地点で行うことを私は求めます。そして、二台の列車を次々に発車させることを私は避けます。速度を制限します。結果がどうであろうと、小さなミスでも厳しく罰します。詳細は以上です。

全体として私はきちんと測って計画された部門を創り、技術者たちは問合わせや無駄な書類に時間を取られないで良く、列車を次々に運行させても、それと同時に電話とか電信によって駅から駅へ列車の遅れを知らせたり、そして事故の可能性に対してあらゆる手段を取ることを職務と見做すのです。やるべきことはそれだけです。それに十分な賃金を支払います。そして艦長が船

を進めるように、自分の部門で列車を運行させることに責任を持ちます。いわば同時に、あらゆる列車を運転しているのです。嵐とか雪とか霧の時には、電話のようなもので全体を減速させることとなります。彼らは二人であったり、或る日は一人であったり、夜は別の一人であったりします。あるいは必要なら三人であったりします。決して市とか祭りとか巡礼で臨時列車を駅から駅へ次々に続けることはなく、私は遠くから追って、見守っているのです。事故の歴史を読み返して下さい。この種の操縦者は殆ど何時も、それらのことを邪魔していたことがあなたはお分かりになるでしょう。

その様な力強い知性にしっかりと良く報いて、何の邪魔もせず、何も考えない人間がいることで、あなたは何かに応えているのです。技術者の本質は、一瞬のために多くの知性を示すことで十分です。例えば技術者が装置を発明するように、それ以外の時間は自由でいるようにしていることです。あなたが一時間とか二時間とか彼らの業務を追って行ったなら、あなたはその鈍さにびっくりするでしょう。

(一九一二年七月九日)

九十八 (主人と召使い)

公平で奥深い思想があり、読者にとってもショックを与えられます。私はそれをブルードンに見出します。でもそれは何らかの意味で、公平さを導くような和らぎの風俗、共感の力、哀れみの文化というものを考える必要はありません。私たちは、動物に対しては穏やかです。不必要な残酷さを酷く嫌います。しかし結局のところ、動物を大きくして、申し分なく交配させます。病気の時は治療しますし、何時も冷静にそして体系的に経営することを目指します。私たちと動物との間には、如何なる公平な関係もないということになります。そして同時にそのことが理解させてくれることは、同情からの共感や親愛さえもが期待出来ることです。

これらの感情は忘れませんし、私は屢々それらを観察しました。しかし、それらの感情は自然な状態によってしか働きかけません。思考と意志はそこでは何も出来ません。脚を車で轢かれて吠えている犬は、ここから遙か遠くで死んだ人間のことを考える以上に私を動揺させます。同じ様に、他の人間の苦痛の表情が自然と激しく雄弁に多くを語っていたとしたなら、それを見ることは露骨な行動や知覚のみや存在のみで私に動揺を与えるのが分かりますが、少なくとも彼が何に呻いているのか私は知ることがありません。そして、一人ひとりが劇場で想像上の不幸を眼の前で体験することは出来ませんが、それは少なくとも芸術的な眼の前の演技の結果によるもので、全く無秩序な感覚の働きによるものです。もしも召使いの仕事に必要なようになってくるかどうか、そこから召使いが主人に行う能力を判断して下さい。主人は直ぐに不満顔になります。憂鬱が主人

を襲います。本能的に、主人は気を散らすために色々なことを沢山やります。

欠席者たちは悪者にされます。それは感情が自然に依存している限り、感情にとつての法則になっています。そして、それが導く処を理解して下さい。もしも召使いが人目につかなかつたら、その時主人は穏やかに彼女を使いますし、少なくとも気にしません。財布を無くした善良な老女を、主人は出来ることなら直接にしろ間接にしろ、原因のない不幸から回復させて心から慰めます。しかし主人は、労働者の要求には全力で反対します。最も低い割合で給与を維持する方法を採ります。原因になっている苦痛を単に取り除かないばかりでなく、自分の意志というもので悪化させることもします。それが同じ人間でしょうか。同じ人間です。彼は偽善者なのでしょうか。そんなことはありません。彼は生まれつきそうであり、繊細で良心的です。敢えて言うなら、それ以上であると理解して下さい。同様に、当たり障りのない〈公平さ〉に依存させたがっているのです。

(一九一二年七月十日)

九十九 (共和主義者)

親切と公平の問題に関して、善き共和主義者が昨日私に言いました、「何故この見解は微妙なのでしょうか。それは臆病でもなく優しさでもありません。自由が最高です。それは個人の尊厳です。この言葉は私たちの国では容易に理解されています。主任司祭たちが余りそれらを私たちに与えなかったなら、恐らく町全体が投票しても五百票も入らないでしょう。平等は最も分かりやすく容易に理解されません。多くの人々がその点について間違っています。平等の権利とか、もしもあなたがお望みなら、如何なる裁判でも二人の如何なる人格でも絶対的に均衡させることが重要であると把握していません。それどころか、そんな風に行つたとするなら、結果は屢々たじろがせることになります。それはまさしく革命的で、それは荒々しい野生的な要求や変わる事のない市民戦争を閉じ込めて隠していますが、それは平等の権利が実際に不公平さによって不安にさせられ、権利のために不正が行われているからです。優しい〈同胞愛〉は共和主義者たちの第一の美德であり、最も魅力的で理解し易いものと私には思えます。多くの人々は、何か知らないうちに他人に導かれます。でも社会主義者になる人は、心からです。」

私は彼に答えました、「あなたが言っていることは大変に正しいことです。それは社会主義者になった心からのものです。しかし、急進的な儘の理性や意志によるものです。そこが問題点があります。もしもそれが愛とか同情とか共感とかキリスト教の倫理による行列が前方に歩いていたなら、行き先は共産主義であり、それ以外の処には到着しません。修道士たちは既に、その答えに気付いていました。社会、道徳あるいはもっと正確に言うなら社交性という本能が、蟻や蜂

においては勝ち誇っているのが分かるように、人間においても勝ち誇っていたなら、一人ひとりの自由を犠牲にして、或る種の共同の愚鈍化へ導くことをブルードンは心底から言っていました。ところが個人は抵抗します。反動分子たちは、良くそのことを感じています。自由と所有権が危ないと思うようになると、多くの人々を怖がらせることとなります。そして実際に、如何なる混乱においても、立派な観念でも整理されないと捨てられて仕舞います。私たちの精神を生かせるように、ですから良きスローガンをじっくり考えましょう。先ずは自由があります。つまり抵抗する精神であり、革命的精神であり、曲げられない鉄の棒のようなものです。その次は、他人の自由の尊重によって荒れた手にある平等です。隷属のない平等であり、自由です。何よりも尊敬です。次は愛しかありません。同胞愛は最後です。人々によって導かれ、人々によって支配されます。高慢でなく、屈辱もなく、恩恵もなく、感謝もありません。その時は男性的な感情で善行を目指して自然に結びつくように、それは他者を尊敬する力から生じるものです。そこからざらざらした手での握手と、礼儀のない議論で本当の礼儀が理解して貰えるのです。ざらざらしたブルードンを読んで下さい。あなたは現実のものを知るのです」。

(一九一二年七月十二日)

百 (人間の魂)

現代の神秘的な神学者たちを再び取り上げます。何故なら彼らは私が話をしたこの種の恐怖心によって大変容易に、明晰な理性に少しは打ち勝つからです。エリートと言われる人々というのは葬列に敬意を示して終えるのであり、教会旗や主任司祭を形づくったもの、あるいは少なくとも合唱隊の子供を養成したものの全てであると理解して下さい。

彼らは、人間の魂が豊かな感情の明細目録を作るのは不可能であり、感情には名状し難い深みを持っていることを自明なこととして言っています。あなたの理性が明晰であるのは、同一の型に沿って人間を作り上げたいと思い、あるいは物質的対象に合わせて自分の思想をまさに何度も規定したいと思うからです。そして、そのことは大変に平凡な内面生活を作ります。要するに、あなたは心の生き生きとした力を殺します。この話は長く継続して行うことが出来て、直ぐに終わりに出来ません。

これらの繊細なことに対して良識は僅かであり、勇氣は多くなければなりません。そして特に、譲歩しないことです。反対に攻撃することです。実例を挙げることです。ここに、自分は迫害されていると思っている狂人がおります。私はそれを初期の精神錯乱と思います。彼は不幸でしかなく、危険ではありません。彼は敵しか見ません。最少のことしか解釈しません。もしも誰かが挨拶を忘れたなら、軽蔑します。もしも手紙が消えて無くなれば、陰謀だと思います。もしも

誰かが同じ道を二回通れば、スパイだと思えます。もしも誰かが心から笑えば、冷笑されます。もしも沈黙を守れば、何かを隠して隠匿していることになります。不幸な精神の遊びです。しかし、それ故に彼は自分自身を作るこれらの全ての下らない話を抜け出るには、何処に毒を盛られた源泉があるのでしょうか。

不安、疲労、鬱病があります。胆汁とか熱による小さな活動があります。心の動揺や不眠です。貧血であったり、消化が悪かったりします。あるいは更に、夢、観念の集まり、妄想、同じ言葉の繰り返しがあります。重要ではない些細なこと全てに気を付けて下さい。そして、年齢や仕事によって私たちは、それらの全てに雇い易いのです。些細なことですが、それらは些細であるから騙されるのです。というのも、もしも彼が重い病気だったら、「私は病気だ」と呟くでしょう。ところが彼はそんなことは何も言いません。思考しません。「私は疲れた」と彼は考えます。「私は悲しい。それは迫害のせいだ」。やれやれ、彼は出掛けます。そして疑いもなく戯言の証拠は、その悲しみそのもの、つまり心底疲れていることにあります。人が憎むのは悲しいからです。しかし、自然に人は反対のことを信じます。そこに複雑で哀れな人生があります。何故でしょうか。何故なら彼は感情を証拠にしているからです。感情に基づいて自分の考えを築いているからです。

道徳秩序で最も美しい発見は、私たちの健康と感情には関係があるということです。そこには私たちの内面生活を清掃してきれいにするものがあります。私たちの感情は屢々、寒さや暑さ、脳の働きとその痕跡による妄想や夢に依存していることが分かります。でもそのことは何の意味もありません。人生の浮沈は避けられず、興味もありません。体の中の所謂魂の爆発を追い払うことが、まさに倫理的な健康です。私たちは狂人を見て、そのことを理解させてくれます。ですから窓を開けて、外を見詰めることです。事物や事物に基づく行動、事物に対する熟視は、私たちの様式にとっての救いです。科学は簡潔な心を作ってくれます。

(一九一二年七月十三日)

(次章へ続く)

百一 (ポワンカレの死)

科学は浪費したという有名なポワンカレに、敬意を表さなければなりません。でも如何にすれば良いのでしょうか。彼は明晰で屢々奥深いことが、近年良く読まれている赤表紙の本の中を一寸見ただけで良く理解されます。しかし、彼の内面の思想は外の処で発展しています。彼にはこれらの優れた〈概要〉が重要であり、ライプニッツが言うようにそれは経験という現実を公式に翻訳したり、少なくとも計算式や紙面に書いて、経験の奥底の襞を全て次から次に展開していきけるのです。それらは象徴の世界や抽象的な遠近法であり、対象とした世界における別物のように、秩序立った夢想や直観や予感や本当の先見の明を鍛える時なのです。研究の種類は才能によるのであり、彼は他のどんなものよりも、まさしく〈数学〉が必要なのです。というのも、もしも可能な組合せを全て骨折ってやらなければならないとしたなら、切りがないでしょう。しかし長い修業の後の才能は、庭師が丈夫そうな枝を見分けるように、豊かに発展するものが一瞥して判るのであり、その他のものを削除します。これは私と知り合いの若い数学者が言っていることであり、しかも彼は非常に才能があります。〈数学〉は、信じられない位に詩に似ています。

私は気晴らしのために今朝、奥深いこの思想家が明晰さや独創の移り気を叙述していた本を読み返しました。その思想は何時も深淵の上を架橋しています。今でも基礎幾何学には驚嘆させられる証明の厳密さがありますが、或る面では高等幾何学でも同じです。しかし、配置に関するこの研究は、もしも私が言うとするなら、この開発や点検の研究は、所謂独創後に行われる考証の研究であることを知らなければなりません。科学というものにおけるこの正確で美しい時間は、あらゆる方法で発見されるものであり、証明出来るものではありません。例えばニュートンが一個の林檎とかビー玉のように、月が地球の重力に支えられていると思考した時、形あるものに置くことが出来る前に測定が安全でないことは更に何年も必要になりますし、他のものでそのことを伝える必要があります。最も遠い過去においても、時々太陽の上を通過する黒くて丸い物体は、夜を定期的に明るくする同じ月であると仮定した夢想家が恐らくいたのです。しかし、私たちが考察する事例における捕らえ所のないものや奇妙なものは、それらの予測が突然であり、抽象的な組合せの分野において発揮されることです。そこでの複数のXやYや分数や記号、更に他の記号はより剥き出しで剥ぎ取られて、定義に従って回っています。

これらの驚異的な世界の一つが、創作者と共に終わりを告げたのです。

(一九一二年七月二十日)

代議士たちは役所から役所へ巡ります。彼らの一人ひとは、保護された団体を代表しており、哀れな下層民社会のために寄付を集め、日に十件もの請願書に署名します。彼らの行動は全てが噂どおり滑稽かどうか知ることが大切です。もしもあなたが、これらの事柄の一つ一つを知ったなら、合法的な権利要求も大切であることを殆ど何時も発見するでしょう。全てはパリで行われ、パリは遠くからの声を決して聞き入れません。それが昔からの習慣です。重要人物がこの書類の埃を全て吹いて読むまで、これらの書類は眠らせた儘にして置きます。その時が来ると奇跡が起こります。困難は消え失せます。最早、猶予はなくなります。パリ人たちは、その気になれば何度も笑顔を作って、てきぱきと事を行います。田舎住まいだった副支配人の行動では、何年も前から、一週間と決められていた調査すべき事件を再度調べたりしませんでした。中央集権化はこれらの混乱や不正を解明して説明しますが、君主制擁護者の精神も考慮に入れなければなりません。それによって単純な権力の行使は特別待遇になります。勧告があったものにおいては、十回のうち九回は不正があり、そのことは勧告が必要ということになります。そしてここに責任を持つのが行政であり、市民ではありません。

しかし、勧告は増加しているのでしょうか。代議士は請願書を読み、答え、推薦文を記入して大部分の時間を過ごすのでしょうか。結局のところ、そこに正義があるとあなたは理解していないのでしょうか。一票は一票でなくなり、他の価値になります。市民たちは誰もが同等の力を持っています。彼らはそれを行行使するのを学びます。貧しい小作人は息子たちに収穫期に仕事をするように、代議士を通して頼みます。そこに我慢ならない濫用があるというのは本当ではありません。反対に、私たちが少しずつ正義に導くのを必要とするのと同じ力しか見ないのは誰でしょうか。

しかし、事務局は少しずつ王の力をそこから失っていきます。甥や従兄弟たちは最早、有権者の前から消える時代であると認めています。多すぎる特別待遇が、その特別待遇を殺しています。私は事務局に一人の伯父がいました。しかし私のライバルでもあった伯父には、脅す代議士がいて、動き回る大臣がついております。そのため私の伯父はもう事務局におりません。あなたは大変に不公平であると理解するのでしょうか。再選されることを何時も考えているこの代議士に対して、信望のある人々や官僚たちの特別待遇をあなたは理解するのでしょうか。軽蔑すべき蛙や小さな池に反対して、高潔な憤慨運動の源の一つをあなた今認めるのでしょうか。この貴族は言いました、「一匹の蛙は千匹の蛙よりも価値がある」。しかし、一人の人間の頭が今は何よりも価値があるのです。陰謀家には落胆させる見方です。従って、彼は至る所で叫ぶことでしょう。「おゝ、小さな池の下級の者たちよ!」。叫びすぎです。私たちは大変良く理解していました。

(一〇一二年七月二三日)

百三 人数と権利 (LE NOMBRE ET LE DROIT)

「民主主義は人数による支配ではなく、権利による支配である」。この言葉は私が最近知ったものですが、現代史においても良く考えて良いことです。というのも〈比例代表制論者たち〉は、〈共和制〉とは別の概念というものを持っているように私には思えるからです。彼らが言うところによれば、権力はより強いものに戻れば十分なのです。正義は最早求めないのです。

私としては、〈共和制〉は全く別のものと理解しています。独裁に合法は決してありません。そして数の力は、最も小さなものであっても権利の始まりを作るとは決してありません。権利は平等の中にあります。例えば、誰もが宗教を選択すれば、実践する権利を等しく持っています。一人の権利は他人の権利を限定します。彼は、多数とか人が望んでいる決定的でもある権利、そして全員一致に反対します。十二人程の異端派に自分の信仰を命じたかった宗教の問題についても、そのことを前提にしてみましょう。

更にもっと正確に話すなら、民主主義においては単に如何なる党派も権力がないばかりか、最も良いのは最早権力がないことです。行政官がいることは、平等と平和と秩序を維持する役目を与えるためです。しかし、これらの行政官は一党派の名で行動すべきではありません。例えば裁判所の判決は、進歩主義者が権力を大変急進的な進んだ処へ持って行っても、何も変えられないのは極めて明白です。

しかし、最も力のある政党には制定する法律そのものがある、とあなたは言うのでしょうか。それは間違いです。法律は一致して制定されるのであり、如何なる政党の精神もありません。労働災害についての法、退職年金についての法、結社についての法は、良識の表現形式であり、政党とかその他のものが持っている権力には決して依存しない状況によって提案されるのです。そこには工場があり、プロレタリア階級の人々がおり、ストライキがあります。君主制がそこに同じ様に示されなければなりませんし、私たちと殆ど同じ様な法律に基づいて行われます。もしも私たちが所得税を制定したなら、共和制が独占権を最早持つことがないとは言えません。〈家族財産〉についての法、又は安い住居についての法は、良識による解決と必要性を表しておりますし、これからも表すことでしょう。

従って私は、政党の論争は実際よりもアカデミックであると思います。それを理解することが出来るのは、立法府の議論においてです。誰もが共通した良識を代表して話すのであり、多数からなる政党を代表して話すではありません。政治家ド・マン(1)やジョレス(2)は、信じられない位に良く理解し合います。要するに立法府の秩序において、多数派は圧力を感じさせるだけではないと私は理解しています。満場一致は寧ろ、公の論争や継続した公平な仕事、そしてあらゆる意見や批判に対しての自由を要求します。国民は立法者を望んでいるのであって、独裁者を望んでいるわけではありません。こうした理由から、票を大変正確に見積もるのは子供じみてい

ます。そうであるなら最も力のある政党が、不公平な権利を持っていると信じさせることになり
ます。それは耐え難い制度です。

(一九一二年七月三一日)

(1) アルベール・マン(一八四一~一九一四)は、カトリック労働者協会を創立したり、労働者保護立法に尽力した
政治家である。

(2) ジャン・ジョレス(一八五九~一九一四)は、統一社会党の指導者として反戦平和主義を唱えた社会主義の政
治家・哲学者・歴史家である。

百四 (民主主義と政党)

抽象的で空想的に政治制度を判断する必要はありません。民主主義は多くの形態を取ってきま
したし、これからも取っていくでしょう。常に独裁に反対するものですが、国民一人ひとりには実
際に感じた独裁に反対して組織的に行動します。恐らく、田舎の専制君主が長く支配した地方も
あります。民主主義の精神は、封建制度に反対して〈国民と兵士の父〉である王を歓呼して迎え
ました。偉大なるナポレオンは、人民の力を代表しました。ヨーロッパの専制君主や、お金で雇
われた軍隊に対峙したフランスの国民は、戦争と独裁者の制度を現実の力によって受け入れま
した。現代の英国では、民主主義は特権のある貴族に密着した君主制に支えられていることも可
能にしています。この種の闘争において肝心なことは、一身を捧げている元首を崇めないこと
です。そうでないと歴史は、何時も同じ円を回ることになります。解放者は自分の塔で暴君にな
ります。

私たちフランス人にとっては、まさしく丁度今、私たちを脅す暴君という種類の人間が何であ
るか分かることが重要です。ドレフュス事件が私たちを十分に明晰にしてくれました。しかしそ
の後、鉄道ストライキ後の会社の姿勢も同様に教訓以上のものを齎しました。従って敵の軍隊に
関する調査をもう一度行いましょう。私は将軍や海軍大将を、首脳部の人々や官僚や社交界の人
々や聴罪司祭や御用商人たちと共に、上流階級と理解しています。これらの高貴な人々を大変に
高く評価しますし、私はそのことをあなたに断言します。しかし、彼らが持っている力は彼らを
惑わせ、民主主義的な考えを適用するのを前提にすると多くの苦労があるのを私は理解してい
ます。国家が防衛と、市民の自由を一緒に運用させていくことは、小さな問題ではありません。

官僚という二番目の軍隊はそれ以上に恐ろしいものです。行政官、国務院、局長、視察官、
知事、郡長、警察署長、政府関係者及びジャーナリストは全てが資格とかペンとか監督業務とか
で生活する者たちです。彼らの権力は間違って定義されていて、屢々現実よりも表面上は優位で

あり、結局のところは精神的な力であり、敢えて言うならそれは尊敬されたいのであり、あらゆる事柄の秘密を探し出して、監視を拒絶し、諂（へつら）いの精神や団結心を育てているのです。もしも公正であって欲しいと望むならば、官僚というこの軍隊においては何人かの代議士も教育、結婚、仕事及び社会との関係により兵役に就かねばなりません。

三番目の軍隊は銀行家です。それは確かに一番恐ろしいものです。お金と贅沢と輝く人生の威光によって、彼らが前者の二つの軍隊を支配していますが、取分け二番目の軍隊を支配しています。彼らは少数の代議士によって議会に取って代わり、殆ど全員が弁護士で極めて抜け目がなく、そこでは私たちはまさしく最良の大臣を充てなければなりません。勿論、奉仕者として充てるのであって、主人としてではないことに注意して下さい。以上は、有権者が一政党の手先となって降参してはいけない理由です。

(一九一二年八月五日)

百五 (普通選挙)

共和主義者の基本は明らかにされていません。最近の議論がそのことを十分に証明しています。市民が半分より一人でも多ければ、半分より一人でも少ない人々への暴政を行う権利があると主張したい時は、何か大変に理解し難いことを言っているのであり、我慢出来ることではありません。恐らくフランスには、主任司祭の前で結婚する市民は半分以上おります。しかしその時、如何なる共和主義者も法律によって他の宗教による結婚も承知し、受け入れるに過ぎません。フランスにはユダヤ人が十万人もおります。しかし、ユダヤ人に反対する法律があれば、それは権利に反対することになります。一万人の巡礼者が列を作っています。彼らは宗教的偏見に捕らわれない十人の自由思想家の帽子を合法的に脱いで、多数の人々の法律に従って行くのでしょうか。そうではありません。自由思想家だけが敬礼しない権利を持っています。要するに、大多数の人々が実際に権利という力を持っていると私には思えません。もしも急進的な人が君主制擁護者を論難して、裁判官によって特別に扱われたなら、それは不公平になります。最大多数者の行為は全ての市民に平等の権利を保持するよう努力していると言えます。それを可能にして守ることは、全ての人々のためになることです。以上は基本中の基本です。

しかし何故、普通選挙なのでしょう。何故なら満場一致は不可能であるからです。でも満場一致は何時も目標にされます。人々は良識に従って法律を制定しますが、感情的にはなりません。同様に人々は支配します。理想は、全市民が情熱を静かにさせるだけ、法律に同意することです。例えば政教分離法も、カトリック信者たちの多くが同意しました。何時も狂信者や激怒する人は沢山おります。最も多くの人々と一致することでしか彼らに対抗出来ません。最も多くの人々が最も強いからではなく、貧乏人とかお金持ち、都会人とか田舎の人、あらゆる職業の教養ある色々な人間に相談しながら、情熱を排除する機会を手に入れるのです。もっと良く探して

下さい。普通選挙は近似的な方法です。

例えば労使間に争議があります。何処で調整されるのでしょうか。そのような場合には最も学識があつてお金のある人々が、理性よりも情熱に従つて決して判断しないことを経験が分からせてくれました。それ故に法の番人たちは、何回も法に違反しましたし、他のものを探しました。今は国民が裁判官ですが、暴君ではありません。そして代議士を名乗る時、彼は裁判官を選択しますが、暴君を選択しません。それ故に情熱を排除した人に投票しない比例代表制論者たちの基本的な論拠は、殆ど私には的外れです。

(一九一二年八月六日)

百六 (法律)

ギリシアの賢人が夢の中に現れて来て、良く分からないのですが私に言いました、「お前は自分の考えを最後まで行かない。正確に法則どおりに行うことは確かに困難ではないが、人間が満足出来る法律を手に入れることは困難だ。それらは霧の中での思考であり、雨の多い地方で生まれる。しかし、お前は私たちが学習したことも忘れてはならない。全ての法律は正義に適っている。もしもその思想を正面から良く考察しないで、背中を向けて幾つもの事例を見付けに行つたなら、お前の周りで良く眼にする不正は立法者が全てを予測しなかつた結果であるとか、あるいはまさしく市民の自由を尊重したかつた結果である、と難なく私はお前に分からせることだろう。しかし、この議論に私たちは時間を無駄にしてはならない。兎に角、少なくとも法律の理念を思考せよ。如何なる法律も正しく、それ以外のものではあり得ないことをお前は理解するだろう」。

賢人は言いました、「法律は社会を作る。法律は契約であり、業務とか義務の交換の手続き行うものである。価値が同じものとか、業務が同じものしかこの世では交換されない。この法則が無いものは全てが戦争であり、盗みであり、不正である。反対に法律は私たちを平等にしてくれる。そこに本質がある。それは公平であり、さもなければそれは法律ではない。次のことを考えなさい。不公平であることは、自分自身は義務を逃れ、他人に義務を課すことである。従つて暴君的政治は、決して法律の形を取らない。法律はポールでもジャックでもない。法律は全市民に共通した何かの義務や禁止を示している。そして、そのことが公平である。通りの隅で毎日四時間も監視に立つのは、お前には骨が折れるだろう。しかし、もしも他の市民たちも同じ方法を義務にさせられたなら、それは決して不公平にならない。実際には嵐や火事や洪水やペストになるのかもしれない。全く必要不可欠な業務を与える戦争になるのかもしれないのだ。そして市民の義務に制限を設けることは誰も出来ない。しかし、公平さは決して状況に左右されない。国家の

安全は、ほんの一瞬でもその公平さを決して弱めない。反対に公平さを立て直し、眼を皿にして光らせている。最も骨の折れる義務を想像して下さい。もしもそれらの義務が法律と同じ形を取りたがるように、誰にとっても同じであったなら、お前はどんなに小さな不正の足跡もそこでは眼に入らないだろう。それ故にお前は、人間の世界に完全な公平さなどあり得ない法律を見付けようとするが無駄である。私は自分自身を私が生まれた町の法律に従った。そして、あらゆる法律がそうであるように、それらの法律も絶対的に公平であった。しかしお前は、私が終わりのない旅に出た後で、直ぐに最も困難な仕事を残しておいて、法律は決して犯されないに違いないという考えを本で読んだのだ。この用心から私は、汚れのない栄光を守り、誰も私の立像を侮辱しなかったのだ」。

(一九一二年八月七日)

百七 小さな水溜まり (PETITES MARES)

郡選挙の投票に対して言われていることでしたが、最も明白になっている利点については殆ど何も言われておりませんでした。多分、それは次のことに尽きています。投票する大部分の人々は、特権者に仕えているのです。そして、代議士に関することで不公平を齎すのは、貧しい人々に関心があるからです。そうです、彼らの中で最も反動的な人々でさえ、何時も有権者たちの中で最も貧しい人のために、僅かばかりの手紙を書きました。でも彼は少なくとも最も急進的な代議士と或る点によって異なります。急進的な人は、反動的な人が忍従するのと反対に、細民からの力を受け入れます。従って高級官僚は自分よりも高い給料の二、三人の前でしか平伏してぺこぺこしませんし、再選されることを考える代議士には楽しそうな顔をして軽蔑します。要するに国民の代表者たちは、現代では少しも評価されません。そこにはびっくりするような不正があり、それには抵抗しなければなりません。私は満席の議会を国の忠実な顔と見做します。彼らは自分自身を嘲笑する優雅さや勤勉さ、結局は彼らが話すことに関して学識の深さを自ら与えていますけれども、それは正直で真面目な人々の集合です。あなたはそれを判断するために、官報を読みさえすれば良いのです。

その他のことはあり得ません。郡のこの小さな水溜まりには、ひたひたいう最も小さな波の音でも世界中を目覚めさせます。全てが分かります。でも私生活、夫婦喧嘩、借金、金策、不品行、大胆さ、過ちは、判断も追いつかないものであり、全てそれらは分析され、我慢ならないけなし屋によって白日の下に晒されます。世論は、党派心によって道に迷いません。というのも敵には同情がないように、最も忠実な友人には慎重さがあるからです。その結果、各党派は必然的に最良の人々から立候補者を選択します。あなたは歴史でも何でも直ぐに反論します。しかし、絶

対的美徳を持っている人間を発見して下さい。

そして、有権者が何によって欺かれるのか、あなたをご存知でしょうか。大胆さであり、巧妙さであり、演説の巧さであり、びくくするような政治家の仕事に欺かれるのです。力は人目を引きましますし、物事が上手く行く時でもあります。ところで党派や党派心でなければ、力を与えるのは誰でしょうか。それは郡に課すよりも、党派に課す山師の方が容易であると私は断言します。私たちが教化するために、極めて厳格に統一された社会主義者の党派という見本を私たちはここに持っています。それは最も愛しい子供たちのうちの或る女性たちを、恐ろしさと共に排除しなければなりません。それは当然です。教義に服従すればする程、野心的で積極的で雄弁な人間を何故支援しないのでしょうか。人々は言います、「それは国の政治家です」。そして、それが全てに答えています。私は白状しますが、人々はその時、郡というけち臭い処の上方を上手に飛んでいるのです。しかしフランス共和国が、人々の才能とか誠実さ、偉大な文章とか若い人々の美徳によって、生き生きとなっているかを知ることは大切です。党派が調査されることが語られます。私にとっては、より正確な計算の方が正しい選択になります。そして、党派が私に課している恐るべき陰謀とか有名な雄弁家になることよりも、私は清廉潔白で真面目な敵によってより良いものになるのです。

(一九一二年八月八日)

百八 (労働契約)

「他人の費用でお金持ちになれる者は誰もいない」。正しくて普遍的と認められているこの原則に、私は何時も感嘆していました。そして、それに従って理解するなら、平等な価値による交換しかないということです。そのことは公然の研究で公平と不公平とは何かを大変良く知るまで理解させてくれます。従ってそれらの原則は大変正しいのです。如何なる場合においても、それらを応用した状況は完全です。全ての困難は、交換された事物の評価にあります。そして、裁判官が正しい価値を十分明瞭に量る度に、正しく裁きます。

その裁判官は、交換が浪費癖とか無能力という烙印を押される、忽ちその交換を認めません。しかし、その烙印は何からなっているのでしょうか。交換の価値はまさしく明白に不平等であるということになります。そして何時も市場に任せます。ダイヤモンドや彫像や絵画は、良く似た事例に従って、公の競売で決定された金額で評価されます。無知とか需要の支配の下で決定される市場が、裁判官たちによって承認されるというのでは本当ではありません。裁判官たちは上手に言います。しかし、それは権利に関する他の原則であり、「契約は党派の法則である」。しかし価値を軽視し、気まぐれに従ってあなたに財産を狂ったように浪費する権利がある、とそこで結論を下してはなりません。あなたが荷物を運んで貰うように頼んだ運送業者が、「何も保証し

ていない」からと言って、あなたと慣例に従って行えるという結論を下してもなりません。そのような契約は認められません。何故なら筋が通らないからです。嘗て鉄道会社は一種の契約である手荷物預かり証を発行していましたが、如何なる物が紛失しても最早三十フランと認めていました。私が思うに、服一着の紛失には五十フランであり、大型トランクなら六十フランです。

金額は大したことはありません。興味あることは、それらのやり方が無くなったことです。如何なる裁判所も斟酌しませんでした。あなたが物を預ければ、返して貰わなければなりません。あるいはそれと等価値の物をあなたは貰わなければなりません。紛失は、お金持ちになることよりも、もっと許されるものではありません。既に今では、唯一の困難は評価額にあるのです。

それ故に女性労働者の要求は、決して新しい権利ではないと言えます。その労働とは、奇妙な商品のようなものです。私は召使いに日給を払います。彼は、私が命じていることしか行いません。日給の労働価値は、彼を雇っているということで多くが依存されます。彼が持っているのは機械であり、観念です。絶好の機会も同じです。結局は多くの状況と協力によるのが労働なのです。それを疑えば、労働の価値は自然と非常に低いものになります。その労働者は浪費家のようなものです。彼は将来が楽しみな青麦を食べるのです。だが、その上更に本当のことを言うなら、労働契約というものは決してありません。期間と保証を定めてそのような契約を人が締結したかった時、裁判官は抹消されない規則を適用します。それ以外の全ての約束は無効になります。

(一〇一二年八月十七日)

百九 (陪審員)

私は、議論もなく提案されて施行されたこの改革が優れているとは思いません。その後では陪審団が事実について最早単に討議するばかりでなく、罰についても討議することになるでしょう。制度に従って陪審員が証拠を決定して公開弁論後に、その様なことは事実か否かが審問に付されて、証拠が十分に認められれば、その様な行動が予想されて法によって罰せられることになりました。その他のことは裁判官に任せます。でも何も変えられません。というのも陪審員が重要とした行為には必然的に権限が与えられていたからです。さもなければ、陪審団の結論は決して正当に理解されなくなるでしょう。被疑者が実際に殺人の罪があるか否かを尋ねる時、彼が死の原因になっているのか、少なくとも人は尋ねません。正当防衛で殺したのか否かを尋ねる時、あるいは知らないで殺したのか、あるいは盗んで殺したのかを尋ねる時も同じです。犯行は不意であるのか、計画的であるのか、も同じです。それは昔からの歴史的な問題なのです。

同様に、もしも私が今望むべきことがあったならば、それは大雑把にかつはっきり示すことな

く罪を認めずに、情状酌量の状況を明白な言葉で表すことです。この様な状況には、思いがけない機会があります。暴力沙汰でも同じです。挑発も同じです。しかし、それは何時も幾つかの状況があります。罰は個性化されません。罰は人物よりも寧ろ行為を対象にしています。そして法は万人に平等です。

罰には〈必然性〉という性格がなければなりません。さもないと醜悪になります。実際に、もしも私が自分の意志で刑を宣告したり罰しなければならぬ時、私はどうすれば良いのでしょうか。それ故に私は熟考して、人間の死とか人生を決めなければならぬのでしょうか。それは罪を重ねることになります。というのも人は決して全てを知らないからです。長所とか短所の問題になるや否や、私は賢者のための定義しか知りません、「自分自身に厳しく、他人には寛容に」。この考えによって私は何時も解放されます。そして私は昔、この精神状態で自分を見出しました。何故なら、私は陪審員になれば、それと同じことによって裁かれるだろうと想像するからです。しかし、決して裁判官たちはおりません。それは次の言葉で通常では大変良く説明されています、「正義は当然の成り行きを示す」。しかし人は良く言っていました、もっと適切に言うなら、「罪は当然の成り行きを示す」です。

何故なら殺人犯の生活は、自然法に従うのは不可能です。もしも彼が自分の行為と同じ結果を味わうなら、かれは死にます。泥棒も同じです。もしも味わうなら、泥棒は恥辱に気付き、社会生活から排除されます。罰するのは裁判官ではなく、〈必然性〉です。その性格は、人間の判断に委ねなければなりません。裁判官たちは少なくとも被告を、間違いや中傷から守らなければなりません。それは被告の権利です。起訴されて、間違いや中傷がないと証明されれば、裁判官は保護者としての手を引っ込めます。犯罪が結果という果実を生みます。死刑は争いでの法則を説きます。それに基づいて罪ある人が生まれます。私は、陪審団が反抗し裁判官になりたがっていたのを良く知っています。法という厳格な装置によって、自分の役割の中で維持するのは尚更当然のことなのです。

(一九一二年八月二三日)

百十 (雲)

曇った天気です。この間の夏が惜しいですが、私たちは満足です。後悔したり懇願したりしないことです。それは私たちを悲しませるだけのものです。寧ろ、感謝してみましよう。夏の雲は美しいものとして注意して私は見ると言いたいのです。万物が言っていることを神に感謝しなければならない、と人々は嘗て言っていました。神は別にいて、それが正しいことであり、最も明白な義務は全ての者に喜びを与えます。私は、雲の列に見とれているために、多くの訓練をする必要はないと敢えて言います。窓から見た海岸は決して取り除けません。そこには一種の不安が

あります。それらには雪を被って青味がかかった灰色の山々があり、前方の南の方は暗く、東の方はより明るくなっています。そこからは光に溢れた海岸です。南西に広がる谷の上の雲は、もっと不規則です。時々髪を乱したように煙っています。時には低く立ち籠もり、セーヌ河支流のエーヌ川が長く流れています。しかし、それは夕方のごとでしかなく、日の長さが戦っているようで、屢々小丘の方へ遡っています。その次には木立のカーテンを沈めて、もう一つの風景を作っています。直ぐさま私の田舎風の屋根の上では水滴の音がします。私たちは雲の中にいるのです。それを知るには良い機会です。

雲とは雨です。機関車が冷たい大気の中に熱い蒸気を一気に放す時、誰もが美しい雲状の形をしているのを見ることが出来ますし、光を反射している時は白く、陰に隠れると暗くなります。突然に冷えた水蒸気が広がると雨にしかありません。そして大気と何度も混合しなくなると、その渦巻は広がって形が生まれます。ジュネーヴでローヌ河に注ぐアルヴ川のように、明るい大河に激しい勢いで注いでいる泥のような川の時も、同じ様に丸く帯状になった表面が観察されます。

雲を作るこの細かい雨は、水滴が小さくて軽いために決して落下しないと屢々言われています。それはスコラ的些末主義のものです。水滴は落下しますし、主に二つの原因で変わって行きます。空気の抵抗は、水滴の広がり弱くなってくる代わりに表面が大きくなればなる程作用します。そのことは水滴がより小さくなくても起こります。例えば一個の大きな球を十個の小さな球に分割してご覧下さい。全体の容積は同じですが、空気に触れる表面は非常に大きくなり、抵抗も大きくなります。二つ目の原因は、水滴を小さくする蒸発です。それは落下を鈍らせ、最後には落下しなくなります。あるいは凝結して大きくなり、加速して雲を大地に引っ張ります。かつ二番目の状態は、再度蒸発した水の量と温度に依存しています。この様にして乾いた暖かい空気によって雲は終わりになります。しかし、何時も雨になります。そして暖かくて湿気のあるエア・ポケットに冷たい空気が入ると雲が生まれます。いわば雲が風に運ばれるということは、二つの方法があると理解されています。私が子供だった頃、雲は何時も他所からやって来ると信じていました。今は、暖かい空気と冷たい空気の混合であると理解出来ます。それらがここで雲になるのであり、その間に形を与えられた雲は、その背後で水蒸気に還っているのです。かくして映画では、あなたは何時も同じ馬が走っていると自然に信じますが、その時はフィルムで違うものを代わる代わる映しているのです。

(一九一二年八月二六日)

(次章へ続く)

百十一 (愛国心)

愛国心について統治者たちは喫緊の課題に先ず取り掛かります。彼らは小石で一つ一つの穴を塞ぎます。計画はありません。考えもありません。性急な熱狂に人々は自己満足しますが、それは余りに安易です。これらの盲従的な活動、戦き、涙、私が余りにも屢々認められた確信を見分けた演劇の感動を、人々は愛しております。何でも恐れる人々の特性は、決して戦争を恐れないということです。逆に戦争に対する憎悪は、基本的には殆ど何も恐れないで非難される人間にあることです。これらの矛盾は多分、五分間反省することを大臣に教えています。不幸にも、五分間反省するためには、何時間もの暇な多くの時間がなければなりません。権力者は多忙で厭になっています。それは既に制度的な厭味です。その時は雄大な光景、歓声、その力を真似た強力な眩暈、刺激物、夢想、最後にはアルコールでなければなりません。しかし私はそのことを考えて何回も言いますが、行動する前に興奮する人々を私は決して当てにしません。襲撃の時間を継続させているのは、興奮という藁に付けた火です。しかしその襲撃が期待されることもありません。人は自分を暖めるためにこの藁を燃やすのです。それが熟考し討議する時間の時は、真にやりたいことに身を入れます。それが平和を愛すること、奥深くて完全な自由、容赦のない批判、権力への抵抗、法に従った国民生活であることを人は理解しませんし、理解したくないのですが、それらが不屈の国民に育てるのです。

同じ様な幻想は至る所にあります。諂いは何時も権力者たちを欺きます。一杯の酒を飲んで、既に労働組合員たちを恨んで主人の手を握って涙を流すまでに感動している〈善良な労働者〉の典型の人々がおります。この同一人物の中には、根っからの怠け者、全くのシニスム（犬儒主義）、道具や作品や思想はどうでも良くて軽視するものがありますし、殆ど何時もそうです。私は何時も思い切って言います。諂う者には美德がありません。おべっか使いの大臣殿は、あなたと同様に愛国者で、あなたと同じことを言います。もしもあなたがそれに満足するのでしたら、あなたには困難なことはないでしょう。

しかし、見てご覧なさい。或る種の稀有な労働者がいて、大変に珍しく思い切って言うのですが、彼は水を飲み、女性や子供の権利を考え、ドレフュス大尉の手紙に泣いています。そのことを良く分かって下さい。彼は、赤い野薔薇の花を付けてルーベ大統領の不屈の国民軍になりました。他の人々が酒を飲んでいる時間には本を読んでいる種類の人です。全てに真面目です。罪と罰について、宗教について、学問について、正義について考えます。大変です。全てに誠実です。そのような誠実さにおいて、私は学校の全ての知識、レトリック、諂いを民衆大学時代に大変上手に着こなして、他の人々の前でも自慢して示しました。英雄のようになって裸体の儘彼らの前を出して一度ならず何度も赤面したこともありました。もしもそれが生きている人間の核心でなく、自由な国民の魂でもなかったとしたら、誠実さは何処にあるのでしょうか。もしも城

壁の下まで反駁するためのペンを持っている力強い手が今あなたになかったなら、ローマ人が力強く戦った剣を持つのは誰でしょうか。ペンを取りなさい。思考しなさい。反駁しなさい。私たちはそれを期待しています。

(一〇一二年八月二七日)

百十二 (労働)

「喜びというものは苦しみによって報われる」、そこにあるのは一般的な哲学の原則です。自然の法則に従って私たちには仕事が課せられていると理解して下さい。私は型通りの厳しさを作家に見出しました。若木の周りの大地を鋤ながら、私はそのことを考えました。私は自問しました、「頑張れ、私は今苦しいが、来年になればプラムを食べる喜びを手に入れるだろう」。しかしその原則は、大変に間違った考えでした。というのも私がプラムを食べるのは食べたいからであり、報いではないのです。というのもプラムが成熟する時期までは多くの時間がかかるからです。その頃までには何時も余分なことがあります。秋とか冬とか春とかに、プラムを食べるつもりになっても想像力におけるその時の喜びは、非常に弱いことをつけ加えてみましょう。そして次に、私は或ることに気付くのですが、それはプラムを食べる喜びを持つということであり、労働の果実であると理解して下さい。喜びは、熱心さを獲得した時により大きくなります。従って労働は喜びにとって良い状態であり、買って消費する状態とは違います。少なくとも欠乏が享樂をより強く感じさせるのも同じ様に違います。もっと厳密に言うなら、心の奥深い問題でもあります。

トランプのブリッジをしている人々がおります。彼らは屢々、四スーを儲けるのに大変苦労します。賭け金がなければ、本気で遊べないのは本当です。この小さな好奇心というものは地雷に火を付けるマッチのようなものです。それは一つのきっかけでしかありません。その後で大変に生き生きした喜びが、同じ苦しみから生じます。私は彼らが平凡な遊びに不平を言っているのを聞きます。勝っても勝負をしたこれらの王室の遊びに不平を言います。彼らが愛しているのは困難さなのです。

私たちは、狩人たちもヨーロッパやまうずらの鳥を与えられたとしても無視して、それを手に入れるために大変な苦労をするだろう、と直ぐに理解します。でも注意すべきは老女です。一般に男は苦労を求めるので、大変に愚かであるのを自分で証明します。しかし、それはしやれでしかありません。実際に男は快樂さえも求めないで、行動を求めます。行動が喜びになるのです。私はもう一度、友人のことを言わねばなりません。彼は音楽を楽しみますが、彼が言うには耳で楽しむのではなく喉で楽しみます。彼は高音や低音で歌う時しか好きではない、と言うのを聞いて

て下さい。大聖堂で働いていた人々が、私たちには分からない生き生きとした喜びをもってその音楽に瞑想するのは確かです。閑人は、私が庭を愛するようには自分の庭を愛しません。そしてルイ十四世は、自分自身でバレエを舞ったのを私は本で読みました。同様に私は、人々が役者を求めても驚きません。でも見物人は何処にいますのでしょうか。既に、彼らは比べたり評価するのが嬉しいのです。それも一つの仕事です。アダムとイヴがいた〈エデンの園〉は、つまらない作り話であると私は結論を下します。最も大きな喜びは所有することであり、征服することではないと人間に信じさせるために、自由もなく保証もなく正義の報いもなく、過重労働が何世紀にも亘って行われなければなりません。そして多くの人々は、農民が働くのは所有地への愛からである、と今でも言っています。しかし私の考えは全くの反対であり、農民が所有地で愛しているのは労働そのものであると言いたいのです。それは億万長者に匹敵します。

(一九一二年八月二九日)

百十三 (改心)

私は民衆大学で驚くべき集会を時々見ました。神や宗教について議論すると、あらゆる教会の新帰依者たちや、モルモン教徒たちまでがやって来ました。私たちの仲間の一人で私と十年來の知り合いの会社員は、その思想が全面的にアナキズムを基にして自由を一杯に発展させたものであって、宗教の中にも発見されなければならない実証的な真実を土台にして探求しているとのです。彼の頭の中はテンプル騎士団の秘密もこっそり盗むことであって、無意味なものは無視して意味のあるものだけに一生懸命でした。しかし説教者たちは皆、何か月も前から彼に無意味なことでも受け入れさせることに夢中でした。というのもまさにそれは神話に基づいていて、道徳に基づくのではなく、彼らが固執させられていたものであるからです。従って私たちは三つとか四つの説教を知ることになりました。

彼らが語っていたのは感動的な改宗で、殆ど突然で決定的な倫理の再生でした。その様にして神はそれぞれが奇跡を生みました。その後で神から靈感を受けた女性が話をしました。彼女は、これらの宗教が全てに等しく真実であり、神はきちんとした言葉を一人ひとりに話すために大変に上手な雄弁家であり、此処ではキリストになって示され、その他の違う処ではモハメットであり、抽象的な真理の形で自由な思索家自身となって示されていると断言します。

今度は、機械技師の男性が物語を話す番です。私は彼を弁証法論者として認めています。一流ですが、その夜は単なる語り手でしかありませんでした。彼は言いました、「私は、妻と二人の子供がいた労働者と知り合いになりました。しかし彼は病気のように酒を飲みました。愚かになり痩せ細っていました。結局、完全にアルコール中毒になりました。何度もルグラン博士に診て

貰い、食事療法を始めますが治らず、その繰り返しです。博士は自問して言いました、「この段階になると殆ど治らないのだ」。更に母親が死んだところ。まさにそのために医者を探しに来たその酔っ払いは、今度はすっかり治ったというのです。そして治療も入院も何もなくなりました。その医者は信じません。私も殆ど信じません。私は彼との交際が途絶えます。何か月後に、彼は私の肩を叩きます。別人のように若返り、元気そうで大変に上品です。要するにこれは一つの典型です。彼の子供たちも同じです。今日、彼の長男は、理、理、理工科学校へ入学するための勉強をしています。それというものの年齢が達していないからです」。技師はそのことを話しながら、何時もと違って感極まってきました。彼の声は少し経つと震え出し、話し終わるとすっかり泣き声になっていました。それまでは何時も動じない彼を私は見ていました。

沈黙がありました。そして次に彼は両眼を拭いながら付け加えて言いました、「申し訳ありません。私はこの話をすると泣かずにいられません。しかし私には、言いたいことを言うべき時が来ました。それは改心です。そこには神がいる、と人は私に言います。しかし私は決して神を見ている訳ではありません。私は二人の子供たちと一緒にいる一人の男しか見ていません」。

(一九一二年八月三十一日)

百十四 (戦いの準備)

雄鶏を戦わせるための技があります。雄鶏は訓練されます。食べ物によって興奮します。周りを囲まれた場所に放り込まれます。食べ物や飲み物や同じ様な機会が、人間が戦う技にもありますが、人間は異常な言葉を浴びせかけます。イヤゴー(1)は慎重に計算された嘘でオセロを導きます。取分け制止したり鎮めるのが巧みで、本当の形相を中傷する者に与えます。陰険で腹黒い話とか、少なくとも軽率な話は、大部分が犯罪の主な原因になることは誰も認めるしかありません。この不幸な力は本当に際限がありません。私には幼年時代から仲の良い友人が二人おりますが、興味が反対になることがありません。学習して覚えた言葉で、お互いに殺し合うことにもなります。というのも、純粹に空想上のもので真実味がないものでも、同じものによって夢を見るように強く心に触れるからです。そして最初に見たものが、隣人の精神に悪い夢想を撒くことが出来ます。これらのことは良く知られています。しかし、欲深い人々はやらねばならない時のことを殆ど考えません。嘘つきの原因のことまで決して遡りませんし、寧ろ結果を追います。その様なことが情熱家たちの賭けになります。

そのことによって雄弁家や作家や統治者の力を、国民全体の情熱の上で判断して下さい。オセロが妻のデスデモナを殺すことが出来るとは、信じ難い教えです。というのも例えば、ドイツ人たちは私たちには親しくもなく高貴でもありません。私たちは彼らのことには無知です。彼らの

意見も私たちには分かりません。この方が悪いのです。私たちが知っていることは、彼らの雄弁家や作家や統治者たちから生じるもので、恐らく戦争を準備することが肝心なのです。彼らは確かに、戦争が近いうちにあり避けられないと信じさせることが肝心なのです。というのも戦争の見通しは巨額の出費や力の濫用を大目に見るようになることを誰もが知っているからです。それらと同じ主張が我が国にもあります。そして、そのはね返りは彼らの国にもあります。これらの雄弁家や作家や統治者たちは全てが世論の作り手です。そして非難と讃辞、地位、注文、年金を配る者でもあります。野心家や臆病者というものは考えるのも、好きなように考えたいのです。そして先ず、好きなように話します。単純な人々は世論が正しいと大声で叫んで、そこに加わります。そして世論を信じます。誰もがまさしく自分自身の中で皆と同じように率直に思考する時、独りで考えても信じる事が出来ますが、自分で考えたことに赤面することさえあります。イヤゴーは目的を達します。情熱は全て一つになります。彼らを鎮めることは可能です。本心から鎮めることが可能です。何故なら演劇での裏切りには無知であり、実生活では虚栄心があるか軽率です。実際にイヤゴーは教養と才気に富んだ紳士ですが、情熱を恐れ、公私の争いを呪い、役人の処へ走ります。マキャベリは〈君子論〉に精通していますが、〈君子〉は〈君子論〉を知りません。要するに、戦いに対して考えられる疑念の全てが熱心に行使され、羞恥心もなく頑固であっても、それで十分ではありません。誰にもあり得ることです。そして、原因が分からない者は結果に対してがみがみ言いますが、それがやはり非常に利用されているのです。抵抗する人々に対して統治者たちが良く準備した熱狂は、次第に皆にとっても危険ですから注意して下さい。従って平和主義同盟は、嘗てない程に市民感覚で行動し思考するように望まなければなりません。

(一九一二年九月一日)

(1) イヤゴーは、シェークスピア(一五六四～一六一六)の四大悲劇の一つ「オセロ」の登場人物で、イヤゴーの奸計にかかってオセロは貞操を守っていた妻のデスデモナを殺す。

百十五 服従の義務 (LE DEVOIR D'OBÉISSANCE)

抵抗と服従は市民としての二つの美德です。服従によって市民は秩序を確保します。抵抗によって市民は自由を確保します。そして、秩序と自由を決して分けることが出来ないのは極めて明白です。何故なら短時間での力による勝敗、つまり個人的戦いは如何なる自由も閉じ込めないからです。それは動物のような生活であり、全てが偶然に委ねられています。従って秩序と自由の二つの問題も、対立するものではありません。相関的なものです、と言う方が私は好きです。自

由は秩序がなければ上手く行きません。秩序も自由がなければ何の価値もありません。

抵抗しながら従うことは、全てが隠されていて秘密です。服従を打破することはアナキズムです。抵抗を消失させると独裁です。これら二つの悪政は、お互いに呼び合います。何故なら独裁は世論に対して力を用います。その代わりに世論も独裁に対して力を用います。そして逆に抵抗が不服従になると、権力者たちは抵抗勢力を粉砕するために優勢な立場を取るようになり、独裁的になります。権力者は批判を潰すために力を使って独裁者になります。そういう訳で、何かの後でも理性的な市民は先ず自分を思考に向けることが出来ます。

私たちが存在しているこの時代にあつて、批判する権利が制度や習慣にあつたとしても、不服従は独裁的病原菌を強める確実な方法であり、その権力からは全く逃れられないと私は理解しています。大臣は次のように演壇で言えます、「私は断じて世論を追いかけないで、行動あるのみだ。戦争に反対する話というものは、暴動や脱走を組織的に行うようになるのだ。これは大変明白だ。事実がそのことを十分に証明している。軍人の義務は、平和の時であっても興味や感情と衝突する。もしもその精神が何か過度の寛大さを与えたなら、恐怖心や怠惰、そして最後には利己主義が当然のように与えられて、秩序を乱すことになる。人間の本性はその様に出来ており、もしも尊敬の念が弱められると、直ぐに感情が支配するのだ」。

以上は、まさしく理論的に間違っています。世論の自由が服従に反対すると信じ込んでいる処です。真実はその反対であることを私は証明出来ます。私が理解した限りでは、それに同意し服従する者たちは悪にも従います。何故でしょうか。何故なら彼らは自分自身を管理していませんし、従って自分の感情に対して大変に弱いからです。例えば、事実として権力を受け入れて専制に反対する権利さえも理解しない下士官とか兵士は、将校が不在になるや否や、いとも簡単に些細な義務も無視する者たちであるのが一般的です。兵舎にはこの種の話が沢山あります。専制と我が儘は、自然に一体化します。権利はそれら二つに反対するものです。権利とは思考です。権利は範囲を限定します。従って意思と名付けられている精神力が、受け入れたり拒んだりします。

全ての公共業務においても、それと同じです。宮廷人の精神は、馬鹿丁寧なお辞儀をしますし、出来る範囲で仕事を誤魔化します。頑固者が非常に良く働きます。私は教員労働組合の雑誌を良く読みます。彼らが保証されるためには算数とか文法の授業について書かれてあるものを読むだけで十分です。そこには自由という果実があります。もしも会議の中で彼らが服従の義務と抵抗の義務を明白に定めていたならば、独裁者は力をなくすことになるでしょう。

(一九一二年九月四日)

鉄道員の〈規約〉にはショックを受けるものがあります。それは下院や上院の議員たちからの口利きをすることが処罰を伴って禁止されていることです。私は、大胆で不謹慎な一貫した活動の結果をそこに見ますし、総選挙の当選者たちに対して恥知らずであると敢えて私は言います。このことはほぼ正式に政治家の介入が不正を蔓延させたり、公務を乱したりしていることを教えています。もしも私が代議士だったら、こんな不正は決して認めません。

私は国の奨学金で中等教育費の免除を受けました。それは部分的に代議士の介入のお陰でしたが、私たちは殆ど知りませんし、恐らく調べて分かったことです。この種の調査には市長、郡長、知事、大学区視学、大学区長、上から下までの省庁職員を対象にしているのを私は良く知っています。しかし、彼らは皆モーターのない機械ではなくて、一つの歯車が外の歯車を動かしているのです。十二歳の腕白小僧では取るに足りないものです。彼が職員ならば、同じ種類の要求を全て分類して一つに纏めて、紙に書いて番号を付けて理解するだけです。全てが一様で退屈です。良く言われているように、全てが位階制の道を歩むことになり、擦り切れて色褪せるようになります。代議士からの手紙はこれらの障害を全て超越しています。それは直接的な利益であると分かります。思い切ります。危険を冒します。事務室が目覚めます。回答が要求されます。話をするのは地方の人です。それが地方であり、その様にささやかな土地です。アラスからルアンへ来る知事とは別ものであり、彼はもうリヨンとかマルセイユのことを考えています。

私は政府の調査を軽視しているのではありません。それは必要です。それは外のことを有効に補っています。しかしながら釣合いがなくなるようなことを私は決して望みません。事務局が情熱や熱意をを失うことは決してありません。課長補佐の親戚の好意は何時もあります。口から耳への口コミ情報が多すぎるのは何時ものことです。時々書類の中には間違いが散らばっていますし、あるいは多くの中傷があり、そしてそれが全てを邪魔し、何でも知られるようになるのは事務局が支配するようになる時です。

これらの知られていない力が余りに忘れられています。それらは結局、国王が力を持つようになります。世論の自由が、反動的な課長補佐とか信心家によって直ぐに取り消されることも余りに忘れられています。一種の告解証明書のようなものもなく、労働者としては決して入れない海軍の兵器庫を私は知りました。事務局は彼らに任せなさい。彼らは彼らのやり方で浄化を行います。そして官僚が悪用や濫用に賛成して改革に反対し、権力に賛成して監査に反対し、秘密に賛成して要求に賛成しているのが極めて明白である時は、どんなやり方でも見抜かれていますし、如何なる意味においても浄化は行われます。

政治的圧力によって濫用されたものが何であっても、私はそれを否定することはありません。私はそこに二つの薬の処方を理解します。一つ目は官公庁の抵抗で、それは彼らの義務の一部を成しておりますが、私たちはそれを免除しておりません。不正を拒否することは出来ないと言うのでしょうか。それでは子供です。二つ目の薬は公務員自身が齎すもので、今からでも組織によって正常でない辞令を無効にしたり、告発するのに大変理解があることです。全ては私たちの監視下で自由と平等が実行されて改良されます。代議士たちが好きなように、そして自らの責任で

介入する権利を彼らから取り除く如何なる確かな理由はありません。何故ならそれは最高の保証であるからです。事務員たちのこのクーデターは全く小さなクーデターです。しかし、議会在方針として保証することを私は希望します。

(一九一二年九月六日)

百十七 (自由な思想)

宗教からの自由な思想生活と改革家活動の後に自殺したロバン教授は、直ぐさま評価されています。何故なら彼は勇気のない若い思索家たちに事欠かず、彼らは三十歳直後に、月並みな思想で身を飾る決心をしていたからです。恐らく彼らは言うでしょう、「自由な思想は、本当らしさのない逆説だ。青春の遊びでしかない」。私としては名誉や財産のためには思考しなかった人間を、何時も尊敬しています。決して完全な思考の要素ではないのですが、そのようなことで私は判断したくありません。

私は、自由な思想が大変に抽象的で屢々大変に容易であり、要するに大変に融通の利かない体系的なものであるという点については、少なくとも考えたいと思います。私は、何も書かないが奥深く考える人と知り合いになりました。私が知る限り、彼は体系の全てを完全に理解していました。彼が言うには、若かった時の思想は五冊か六冊の本でまさに一杯になりましたが、五十歳になるとせいぜい三十頁に減少したことを認めて、今では決して書きません。その躊躇いは美しいです。しかし、誰が永遠の三十頁を約束出来るでしょうか。恐らく、精密科学ぐらいです。しかし、もしも政治や道徳や情念に関係してくるなら、対象は沢山になるでしょうし、顕微鏡的に見る領域がより広がるでしょう。それは海のようなのです。小さな舟を造るのは大変に容易です。でもあなたがその舟を動かしたなら、沈むでしょう。

戦争か平和なのでしょう。そのことを書くなら決して三行では済みません。平和と正義が愛されていると言うことは出来ます。しかし、それは情熱と信念でしかありません。平和なんだから、とは決して言いません。正義なんだから、とも言いません。あなたが両方を明確にするや否や、〈力〉がそこに加わります。そして、それと共に戦争です。相違が自然と示されます。というのも類似していることへの美德が、相違を作っているように見えるからです。モロッコでの戦いはヨーロッパの戦いではありません。治安は既に、戦いとは別種のもので。そして一人ひとり、戦いの前後や最中に平和を仕舞い込んでいます。その様にして波がやって来て、あなたの小さな舟はとっくに海の底です。

自由恋愛とか結婚は契約でしょうか。自然に従うとか慎重に従っても出産するのでしょうか。羞恥心とか素朴な単純さはあるのでしょうか。理性は先ずその概念を形づくり、そして他のもの

につながり合わせます。しかし、情熱は止まります。動物は動物の儘です。動物の荒々しさは、一方では私たちの隙を窺い、他方では快樂になって行きます。羞恥心と忠実さが動物たちの肩書きを表します。子供たちの権利が見えるようです。子供たちの相違は、混同されているものを順次に明確にしていきます。思考は余りに小さいです。思考は余りに短いです。難船になります。

宗教か無宗教か。勿論、宗教は超自然のように直ちに否定されますし、その時は自然のように明らかになり、それで十分でなければなりません。というのも宗教は何処から来るのでしょうか。そこに戻った感情は何か新しい対象を探します。儀式は死にますが、再生します。宗教と迷信があります。観念の神と現実の神です。事物への祈りと自分への祈りです。信じることも色々あります。情熱を楽しみたい者には希望があります。解放されたい者にも希望があります。卑劣な宗教には幾つも戦争があります。そして正義が正しいためにも戦争があります。しかし宗教の奥底には何時も自己保存や不正行為がないのでしょうか。

私が最も明白に見えるものに従って肯定し、否定し、思考し、再構築する働きは全て思考そのものです。真の思考に向かったの歩みではなく、本当の思考そのものです。決断することとは結び直すことであり、直ぐに結び目を解くことです。決まり文句というものは盲信です。自由は眠っていません。座ってもいません。

(一九一二年九月七日)

百十八 (平和主義)

ル・ムトン氏は私に言いました、「あなたは先の見えない不安の雲の中を生きています。でもヨーロッパ大戦は起きるでしょう。一部の人々はそれを望んでいます。別の人々はそれを希望しています。心配している人々もいます。皆が予想しています。見て下さい、同盟国が協議して力の立場を明らかにしています。戦艦が何隻も地中海を通過しています。戦争計画が決定された結果であるのが明らかです。何故なら、我が国はブルターニュのブレスト港にいる艦隊を永遠に放棄したとあなたは考えないからです。私を信じて下さい。最近、私は国境を通過しました。真面目な話ですが、兵隊たちの覚悟はこちらでもあちらでも何かぴりぴりとした強い印象を受けました。そしてスイスで発表された正式談話において、私は最近、平和の保証としても軍隊が存在するという平凡な主張さえ理解していません。ドイツ皇帝ヴィルヘルム二世がスイス軍隊の演習に招待された旅程は、戦わなければならないと予想される国に派遣された前衛のようなものでないのでしょうか。

そして我が国においては、最も平凡な政治的理念を非常に困難であるが表している政府の明白な権威を、あなたは如何に説明するのでしょうか。友よ、それは普通の政府ではなく、革命期の

時の〈公安委員会〉であるか、あなたがお望みなら複数の顔を持った独裁者です。要するに私たちは戦闘隊形を取っていたのです。不平を言っても無駄です。行動する日は近く、私たちを捕らえるでしょう。操縦に注意して、隊列の中で静かにしていることです」。

それが全て本当の時、国民や政府の活動が不安の雲と同じに確実に戦争を告げ、更にその上に雨を告げる時、私は再び言います、「そうはならないし、私はそれを望まない」。というのも今は人間の雷雨、要求したこと、結局は罪が問題になるからです。諦めて、所謂必然性を受け入れた者は、誰でも共犯者であり責任があります。私たちは一人ひとりが次のように自問しなければなりません、「私は平和と戦争の主人である」。そして、それ相応にあらゆる機会にその日の会話から行動することは、暴風雨とか霰のように戦争を甘受する人々自身を思い出し目覚めさせるためになります。女性たちは彼らの言葉を言うに違いありません。私は今朝、〈女性参政権のためのフランス連合〉からの通知を貰いましたが、それは同じ目的の国際同盟へ加入した協会です。趣旨は立派ですが、何処で実行するのでしょうか。誰が知っているのでしょうか。多分、このフランス連合は自由思想家たちが行ったように、平和主義は決してその領分ではないと言うことになるでしょう。我が国の政府の好戦的な姿勢と比べて私が心配するのは、その無気力さです。私が見る処では現在の義務は、私たちが慣らして仕舞いたい全ての戦争の観念への、熱烈で疲れを知らない執拗な抵抗の中にあります。私たちは服従しますが、当然のことです。しかし動員命令が出るまでは好戦的な熱狂に反対することを、出来ることなら率直な大きな声で表明しましょう。

(一九一二年九月十二日)

百十九 (情熱と理性の働き)

或る連隊がラッパや太鼓を鳴らして通過します。誰もが突然に、何らかの考えに直接心から襲われます。歩くことは人間的で余りに人間的であり、即座に見世物に変えます。その考えは同意するか、しないかであり、大きく変えるものではありません。というのも血液は流れ、筋肉は音楽に合わせるからです。人体は力を感じ、如何なる疑いも恐れもありません。熱気が、高潔な涙と共に両眼に昇って来ます。唇は震え、鼻孔は大きく開いています。それは突然の幸せであり、比べようもありません。お、冷静な理性よ、お前は代わりに私たちに何を与えるのでしょうか。

これらの感情は私には良く分かっています。それらは大部分の人々には慣れていないと私は考えます。狂気の中では大変に強く、さもないと歴史は不可解になります。理性の働きはその時、些細なものであると私は認めます。しかし、それは何を証明しているのでしょうか。一万人の同志と一緒に〈インターナショナル〉を歌う或る社会主義者は、それ故に生き生きとした感情を体験

します。十字軍兵士さえも全員と一緒に「エルサレム！ エルサレム！」を叫ぶ時は、同じ様なものを感じています。その様な彼らの感情は、主張を証明するのに適切でなくなるや否や、別物になって仕舞います。そして最も生き生きした感情に従い、そのことを証拠としなければならないのか、何時も分かりません。もしもそうであったなら、快樂というものは正しいものになります。というのもこれから生まれる快樂を期待する以上に心を惹く感情はないからです。狂人の熱狂に抵抗するのは非常に難しいように、それに抵抗することも非常に難しいと私も同じ様に思います。そして、激しい感情には用心し、先を考え、それらを齎す状況を予見し、もしも理性がそれを整理したなら、別のものが生まれること、要するに心を制御しなければならない、と誰もが認めるでしょう。

感動は美しく正しいが、その時は理性が先に用意している何らかの行動を起こします。戦場の高貴な馬のように、その感動を人はギャロップで走らせます。しかし、熟考中は心情の勢いを抑えなければなりません。そうでなければなりません。悪い人間は情熱から生まれます。そして、それらの情熱は恐らく、騎兵が最早主人でなくなって、冷静な感情がその時にその乗用馬を導いて行くことを、一般的な考えである世論にします。

それ故に平和と戦争、権利と必要性について考える時は、突撃の合図を鳴らしたり、全員で大声を出す時ではありません。それは戦いの時は大変に良いのですが、静かに相談する時は大変に悪いことです。しかし私たちは賢明さというものから大変に程遠いのです。そして私は、多くの人々が雑誌を読み、車を運転し、集会に参加している時に、この感情の喜びを求めているのを知っています。そして危険を負うことがなければ、人数はもっと多くなります。でも行為から分離したこの行為の快樂には、幽かな墮落があります。

(一九一二年九月十三日)

百二十 (戦争に必要なもの)

飛躍、活気、ご機嫌、感激、最終突撃、演習に感嘆すること全てが大変な偽りです。要するに戦争という現実に応えていないなら、平和にとっては危険です。戦記作家たちはゲームをしているようなものです。陸戦隊の兵士たちが大変な辛抱強さで村を守ったことは読まれないのでしょうか。恐ろしい音響を生んだものである何かしか、言うのを認めることが出来ません。しかし、本当の戦争においては音響が全てではありません。銃撃戦の繰り返しによる攻撃から生じた道徳的結果を私は否定しません。でもこの驚きを理解しないで、眼の前で展開される大変に名高い訓練と同じ性質のものになるのは当然です。良く指導された射撃は、それ自体が有効であって、神の助けはありません。今はもうそれはゲームではなく力です。そして十分に武装された者の意

志も、熱狂を無視しています。

私は昨日、対馬海戦（日本海海戦）でスバロフ号に乗っていた将校であるセミノフの手帖を読み直しました。それらの記述は独創性が広がっていました。移動と合図、戦略と駆け引き、これら全てが船の操縦には好ましいものであり、乱暴な行為の前では廃れて仕舞います。日本人たちは良く狙って、砲弾を恐ろしいくらい沢山発射しました。こうした訳で合図が良く理解されているかとか、方向転換が理論に叶っているかとかは、そんなにも重要ではありません。ロシアのロジェスヴェンスキー艦隊は間違いを犯しました。東郷平八郎も同じでした。しかし、大砲が決定したのです。金属を溶解したり穴を掘り始めて、化学によって継続し、調整し、点検するのはまさしく工業的作業のような気がしますが、相手が仰天し、火災になり、粉碎され、爆発して終わりになります。情操という道徳的力は排除されているようなものです。H. G. ウェルズの小説の中で、〈火星人たち〉が熱い光線や黒い煙を歩かされている時、彼らは勇気以上のものを沢山持っています。しかし人類は多くが恐怖に震えます。対馬の戦いも、この種の問題を明らかにしています。モロッコの戦争も同じです。というのは、それも大砲で決まったからです。

ですから弾薬が多量であるかどうか、そして射撃の正確さが疎かになっていないかどうかを、冷静に点検しなければなりません。というのも、民兵とは何でしょうか。それは目的に直進して殺す訓練をしている人間です。戦争は彼にとって手段でしかありません。彼は決して戦争を飾って美化しません、何故ならそれを決して愛さないからです。この現実主義は勝つでしょう。

（一九一二年九月十八日）

（次号へ続く）

一ノルマンディー人のプロポIV
【2013年12月号】

<http://p.booklog.jp/book/79735>

著者：アラン（翻訳：高村昌憲）

翻訳者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/79735>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/79735>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ